

うどんとどんぶり



第一回結集のあった七葉窟。下り坂の途中、道の中央に大きな牛が居座っていた。突っかかってきそうで怖かった。

外国を旅行していると長期間単独で旅をしている人や異国に渡って一人でがんばっている若い人に会うことがある。そんな彼女たちから時に日本の食事に対する切ないまでの思いがもれてくる。うどんとどんぶりはどうやらそのような食事の代表のようである。

世界最悪の都市とかつて呼ばれていたインドのカルカッタ（二〇〇一年よりベンガル語での呼称のコルカタに変わった）から私は友人と西に向かう列車に乗った。一九八〇年の夏のことである。四五〇キロ先のガヤまで八時間、車窓にインドの農村が流れていく。

ガヤでバスに乗り換え北に向かう。竹林精舎や霊鷲山のあるラージギルが目的地である。ラージギルではどうしても行きたいところがあった。第一回結集の七葉窟（ここですべて仏陀の言葉が経として編纂された）とお釈迦さんが入られたという温泉である。七葉窟の入り口には「中にコブラがいるから入らないように」という看板があり、苦勞して登った坂を飛ぶようにして帰った。温泉には夜入った。弱い光の電灯が照らす、地下に延びる石の階段を下りていくと五、六人でいっぱいになる程の池のようなものが

あった。インド人がするようにパンツを付けたまま底が砂利の湯に浸かった。風呂に入っ
た気にはならなかったが、おオシヤカさん追っかけファンとして満足であった。

夜、この地の日本山妙法寺を訪ねた。日本山妙法寺は世界各地で活発に平和運動を展
開している国際的な仏教教団である。夕食をいただけるようになったいきさつは忘れた
が、薄暗い電灯がともるテーブルにはわれわれ二人の他に、大きなリュックを持った、
すこしくたびれた様子の青年がいた。ぼつりぼつりと語る彼の話から日本を離れ三ヶ月
以上インドを一人で放浪していることを知った。

妙法寺のお坊さんが準備して下さった夕食はほとんど具のないうどんであった。いた
だいておきながら失礼ではあるがそれほどおいしいとは思わなかった。横にいる青年の
お碗を持つ手が震えているのにすぐ気がついた。「うどん、です、ね…」それ以上言葉
にならなかった。ふるえは容易に止まらなかった。「長いこと食べていないのです、う
どんなんか…」彼は幸福と悲哀がまぜこぜになったくちやくちやの顔をしてうどんを食
べていた。

アメリカのユタ州、ソクトレイクシティーの友人宅に一週間ほどおじゃましたことが

ある。冬季オリンピックが開催される前の年であった。ソルトレイクシティーは大きな通りが縦横に走る地方都市であった。大きな通りは昔幌馬車がそのまま回転出来るようにと幅が決められたのだと説明を聞いた。ソルトレイクシティーはモルモン教の聖地であり、モルモン神殿と称する壮大な建造物がある。信者は世界中から集まっているのでどの国の言語でも案内してくれるという、しかもただで。

正面玄関で案内役を待っていると「ようこそいらっしゃいました」と清楚な若い女性が出てきた。愛知県からこの神殿に来てまだ三ヶ月という。元氣そうであった。私は、泊めてもらった家で日本食を作ったこと、外国でお世話になるときはたいがいそうするのです、などと話していた。「昨日作ったのは、キュウリの酢の物と親子どんぶりでした」彼女は突然「親子どんぶりですか」と言ったきり絶句した。涙が止まらなかった。「親子どんぶり、食べたいです」と小さな声が聞こえたのは、ずいぶんたってからであった。

(二〇〇五年九月九日)